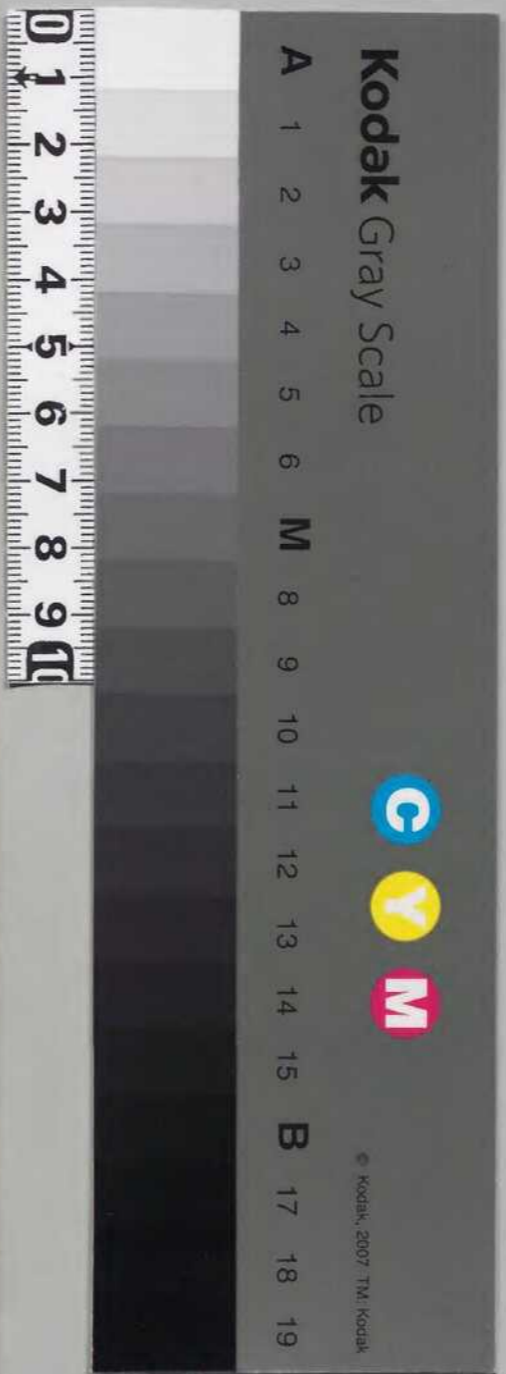
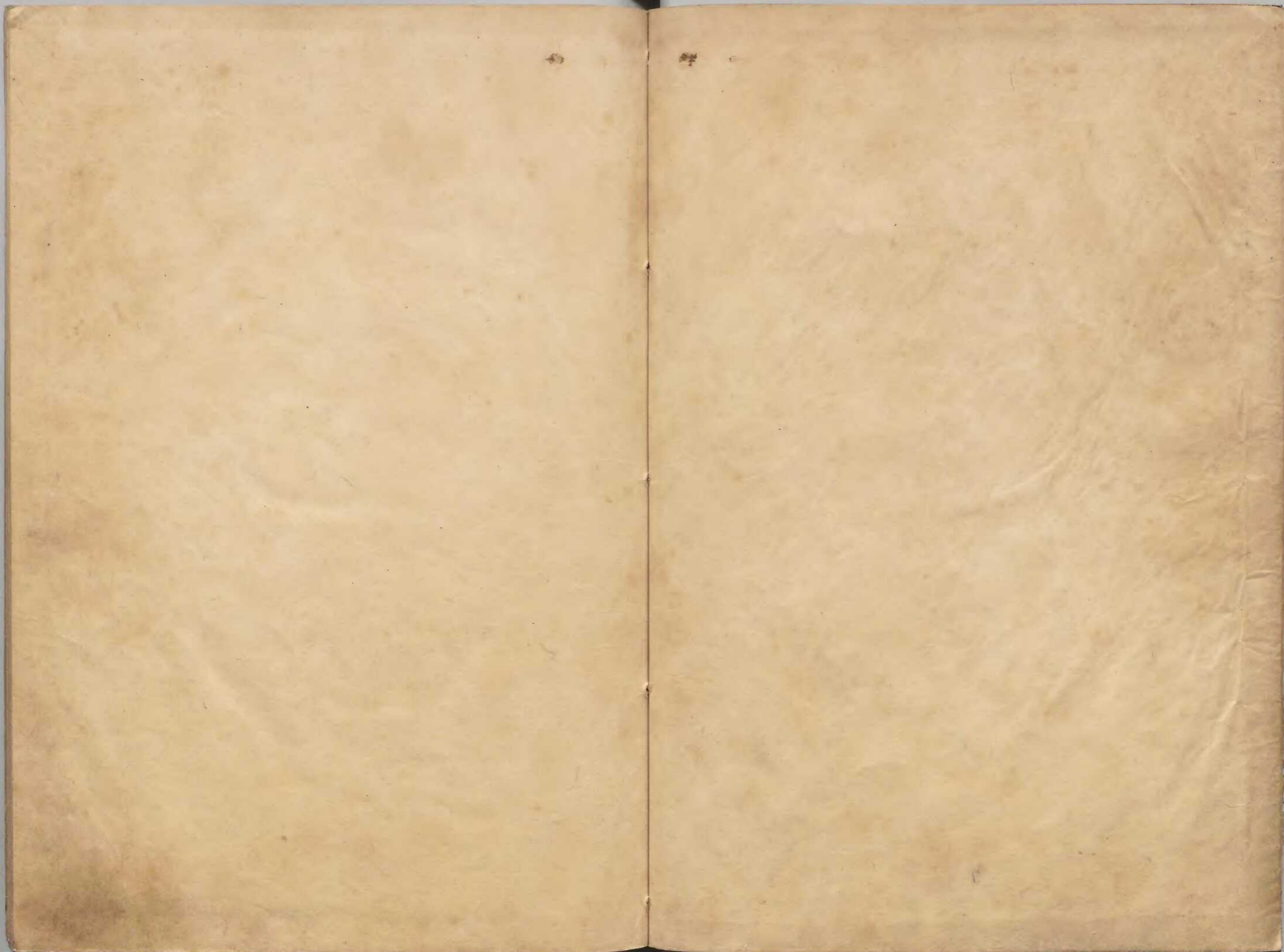


寛永諸家譜

藤原氏  
支流  
癸丑五冊之内七

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186(120)
函號 76 1





津經

多羅尾

成瀬

寛永諸家系圖傳

藤原氏

卷七

支流

津經

政信

家傳いえでん 一いち 行ゆき 通とほ 傳でん 後ご 法ほふ 成せい 寺てら

尚いひ 通とほ 乃なり 相あひ 子こ 之の 形かたち 象さう 此こゝ 授たまは 人ひと 之の 友とも 氏うぢ

也なり 稱なづ 之の 以もつ 其その 實まこと 文ふみ 行ゆき 乃なり

淺草文庫

可々

天文十年五月一日死

法名三津若暘

守信

永禄十一年十月一日死

法名祖岑壽宗

為信

右京大夫

長治元年正月二十日右京大夫

任

同日十二月一日

法名梁宅源棟

女子  
信膳

信建

信堅のぶ

女子

信枚のぶ

越中守えちごのり

寛永六年五月十日没位下よこわけ叙な

越中守えちごのり任と下した十四年じゅうしに

寛永八年正月十日没位下よこわけ叙な

法石寛海くわんかい

信義のぶ

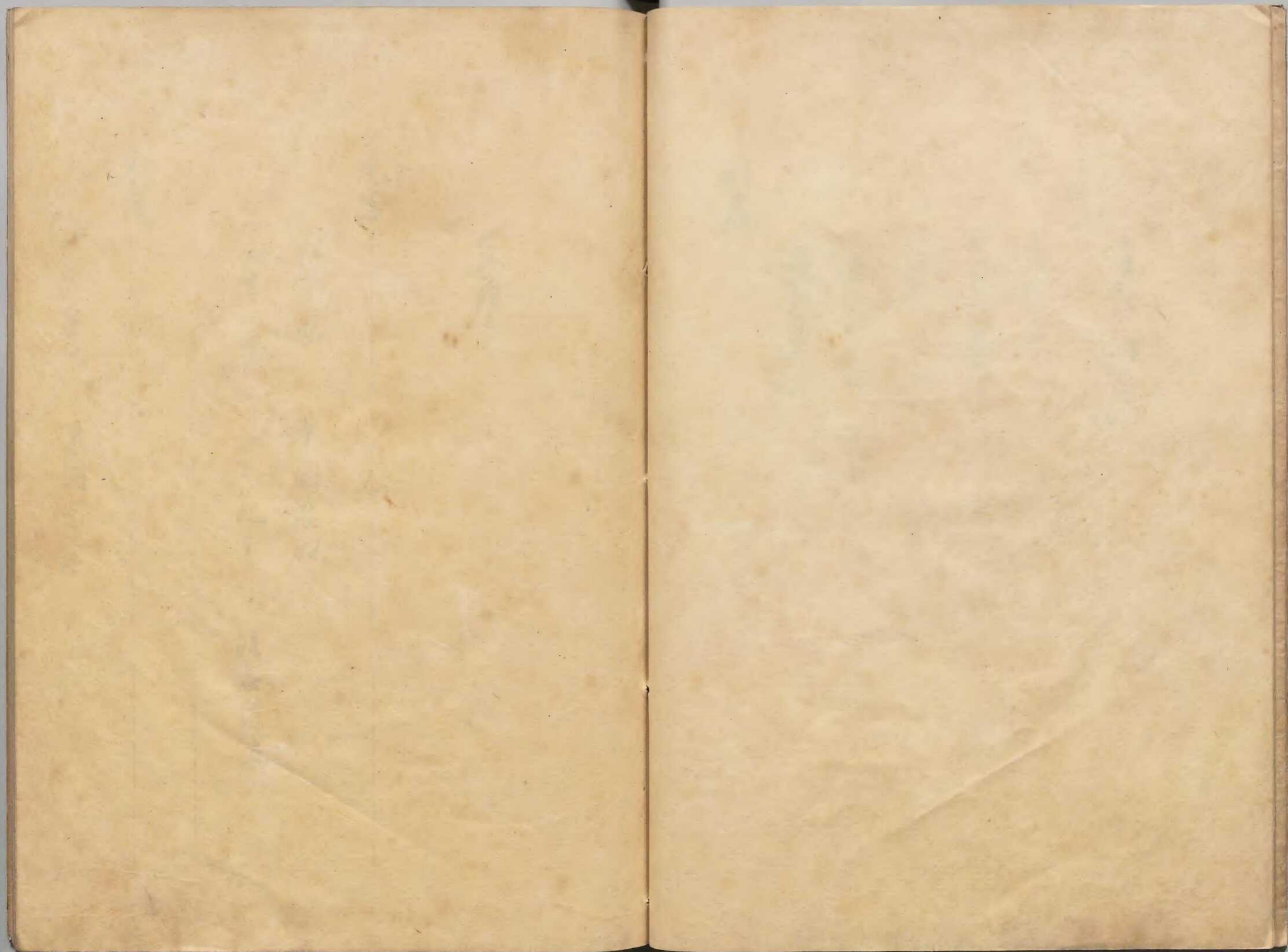
土佐守とさのり

寛永十一年十二月二十九日没位

任と下した叙な土佐守とさのり任と下した

十六年

家紋牡丹丸かゝんぼんがん



多羅尾 たろか

● 光吉 みろく

大京進 おほみやのえ

生國道 なまのち

九十一歳 きゅうじゅういちさい 一 いち 死 し

法石道安 はふしちだん

光俊 みろくに

四郎光俊

生國同前

天正十年六月二日織田信長明智  
光秀がため小弑せし終れり

東照大権現和泉乃院より信樂をへて  
冬列りて至湯をへて於六月

日目に光俊沛胎と結し  
ゆるゆる伊賀路の葉田者となり

松植りてして終る  
九十六歳なりて死す 法石道場

光太

在京遊 生回句前  
考長元年

大権現下湯より至るゆり  
白蓮院殿より川へてまらぬ

光好

久右衛門 生回句前  
白蓮院殿より川へてまらぬ



寛永六年父光右衛門疾あふゆり  
 公升大炊頭利勝とていづく  
 上聞  
 歳令を  
 あり連しとれとら  
 ありあり光右衛門家督とほく

家紋  
 牡丹

成瀬なりせ

家傳いえでんよりいづく先祖せんぞを洛陽らくやうの

紳翁しんおうより流落りゅうらくして冬ふゆ列りゅうり

々々成瀬なりせの知ち小舟こふね舟ふねとてその

子こ又また古帝こてい成瀬なりせををとらとらく孫まご号ごうを

泰親たいしん自みづかれ真起まき一ひとたふ事こととて

乃ゆこれこれははははふ月つき川がはに

泰親たいしん自みづかれ基もととけとけりりゆゆふふととまま

酒井村大少保成瀬等れ教人信

ききくゆつふ又右舟もきこれ

累代清苗家一はよまのり

七八代のは正頼が父の附り

て系譜焼失もつ家ごせりうれ

先をよる事あははと成ふ

え祖の名をとるして正頼を

けいごうと云ふ

系

又右舟

泰親やまのり百子ひゃくしと云ふ

信光のぶみつ百子ひゃくしと云ふ

正頼

友成

牛田冬河

けいごの 清康君よしかん一はよ

清康君

逝去せいこ一はよひくは

廣忠卿ひろちか使つかと云ふ

津流落ありく又駿列りしを  
 浦一門乃を族これよかきりて  
 一はまは村喬長六人盟を  
 一は海はしとありき  
 廣忠卿を  
 長崎の城へ入るは正頼と  
 一人なり

正義

友為

東照大権現一人を  
 當と形家二百五十費の  
 了島居守御有等と  
 多印く軍事と  
 永禄五年回中事と  
 討を列小く

同六年冬列りし  
 正義は

土呂寺より入妻子と携りて是後より  
大徳現正義がもつた海をさへりし  
と感したるい清劫をいふこと  
と感したるい清劫をいふこと  
十月より明年れまうりしこと  
救夜乃戦り正義敵よりあつて  
いさむるは是りしりてこと切と業  
ト冬列星輝也十費の比とく  
すむるは

同七年武田大軍と後一若田色  
い張りの付敵乃先鋒よ金の  
切裂しりし事なることい謀卒を  
下知し正義らぬしむりて謂るを  
わきめ切裂しりし事なることい  
すらりし敵陣よりい入りしこと  
あひ知ることをいふこと  
大徳現大りしこといふこと  
同八年武田の若田色なることい

出張とこれらに死正義あり  
僅をほつる庄飾をこれ  
を着て

大校現り錫一とそしり我推

死とこれとけ僅とけなま

よ人これと悟齋をりうけ時田畷

とつとて大軍あり正義被覆と着

一篠の指物とけりけが僅とけ

さん事ときこれと道と進

大校現これとそしり此年三人をつり

て制一とこのそしり二人を

誤施一とありて死と正義これと

つりとそしりすみ首級と得

ゆけ日此一書首をり

え無名の時川合戦の時黒曜の共と

そしり一と首とめ

同三年三方原合戦一と瘡地と首

ととり島長四郎を討とそしり

変り鳥居もすも首級をゆり

うたふもいゝ人あはれく地

又首と海より志しれどもは軍利

あはれ家いふ才一歩を呼くい

弟心を池は世道の案内者なり

大澄現より供養一總導より

て淡松の城より入るるに人

れ其のりともゆり戦死せん

信とばりくすし敵敵人と物

はわふ討死もけり一歳二十八

一歩

名大島 中園よりむれど

永祿三年小倉列を金甲列り

より信玄が家信諸角を好守が同

んてあり十費の地を伝

同日年信列川中橋乃合戦

を好守討死も敵と首と掲てふ

変ると一歩これを通りしれら

敵と討首とらうて諸首が首にほく  
甲列 足約とありふくまひひそに  
甲府とゆく関東よりゆくまふ  
小條河原れ里見と國府の臺より  
平一少小条より辰一川よ  
首級とゆけ年三列よ  
人の化より抄く事と制と是り  
親族書と過く衣類よ

いふんをこれ抄へり小条とむと  
いふも三年はわたり冬列よいふ  
元承元年埴川合戦の事記

大権現乃磨下りありくさ石よ  
日三年信玄を列り一  
袋井一り宿よ

大権現本身申替上物忠勝等数人を  
しつて先をいふとんせりゆれよ時  
武田が先をいふとんせり見付乃産



一しきふふ小あふふふふふふ

大権現一系をとりしつし使し一書を

川くつふし一せこ道より一里の間に

武田が書と桐まつどはふ志れを法士

事扱へなく清隆トリツル

同年十二月之方原合戦より味方

利をうけたりし引去りてこれに

といふ武田が書七騎

大権現トリしつし此時一少くせしり

寸じ敵一人と斬られたる馬とすし病を

かきありぬ六騎れ共是と見しり

よりしりしりしりしりしりしりしり

同し清島とせしりしりしりしりしり

いしりしりしりしりしりしりしりしり

しりしりしりしりしりしりしりしり

督としりしりしりしりしりしりしり

天正三年長篠合戦の時一少く

甲列の士の様う級指物とす

より、河原下小居より、これを、は、  
た、よ、り、あ、ま、も、あ、ま、一、と、を、  
事、を、

大、現、一、束、と、ら、く、津、使、と、

伝、長、一、り、り、な、れ、合、戦、を、け、  
む、き、や、い、な、れ、ひ、と、な、り、の、た、ま、

伝、長、一、計、と、む、く、と、一、と、  
は、よ、一、及、合、戦、と、一、と、一、と、

名、と、呼、ぶ、ら、

同、年、よ、ら、と、望、む、一、と、心、の、同、

大、現、現、教、を、列、一、津、を、後、あ、り、  
全、部、一、一、二、候、を、せ、あ、福、務、系、の、城、を、  
と、り、は、よ、一、と、外、光、州、本、井、小、山、等、

大、現、の、む、は、せ、を、あ、ま、一、と、一、と、  
は、せ、む、く、事、を、一、と、一、と、  
勢、と、一、と、一、と、一、と、一、と、  
一、と、一、と、

同、八、年、

大校現言三林の城を巡検うらちん——後巻の

おくれあらん事とわらひうらちん——

はろやううく六ヶ年と習ふうらちん

大校現一東と筑うらちん——てのふひなる海うらちん

け世うらちん——やうきまらうくうらちん皇水うらちん

ねとめらうらちん——これとらうらちん——

有者うらちんう急慢うらちんをいうらちん——めんうらちんも

くうらちんゆうらちん一うらちん計うらちん——とるうらちんを

うけうらちんをうらちんううらちんるうらちんまうらちんらうらちんいうらちんくうらちん一人うらちんは

らうらちんんうらちんきうらちんううらちん——とうらちん言うらちんとうらちんら

大校現うらちんきうらちんこうらちんううらちんりうらちん——てうらちんまうらちんらうらちんばうらちん海うらちんをうらちん人うらちん

をうらちんえうらちんらうらちんらうらちんへうらちん——とうらちんれうらちんをうらちんいうらちんふうらちん一うらちん計うらちんこうらちんに

とうらちんいうらちんくうらちん日うらちん下うらちん部うらちん外うらちんへうらちん——やうらちんゆうらちんこうらちんこうらちん人うらちん

ううらちんらうらちんらうらちんりうらちんしうらちんらうらちんみうらちんをうらちん人うらちん——一うらちん東うらちん日うらちん部うらちん

ぬうらちん人うらちんりうらちん——命うらちんトうらちんてうらちん城うらちん外うらちんとうらちんめうらちんらうらちん——

めうらちんたうらちんらうらちん事うらちん百うらちん二十うらちん日うらちんれうらちん同うらちん一うらちん日うらちんとうらちんしうらちんとうらちんこうらちんこうらちん人うらちん

事うらちんのうらちん事うらちんかうらちん——

同十年武田政三の付

大権現市川いらい一いはししままんんああままり  
りりききよよ武ぶ河がののささとと一い舟ふねぬぬをを  
過するる心こころ一いらら彼かがが出いででととああれれはは  
くくささととああままりり隣りん里り人ひとをを見み  
小こままととてて彼か門かど一い書しよ一いてていいけけ  
市いち川がわ一いりりききささらら一い束たばとと平へいららぬぬべべし  
とと形かたちりりままとと武ぶ河が六む十じゆ騎きのの紐ひも頭かぶ  
本もと金かね一い計けい助すけ折せ井い市いちににあありりままりり  
ととれれらら

大権現一達一いままみみくくききささららゆゆら  
一いししままととああままりり武ぶ河が一いらら書しよ  
武ぶ河がののさされれ人ひと笑わらととくくささらら

四年七月

大権現共ともとと叙じよ一い甲か列れつ一い入い新しん府ふ  
府ふ一いららおおけけ一いままんん小こ束たば氏うぢををままりり  
甲か坂さか佐さ法ぽうををままりりののつつららんんらら日ひ百ひゃく騎き  
ららままとと年ねんてて甲か列れつ一い入い美み沖おき子こ小こ陣じん  
とと中ちゆうらら新しん府ふ一い對たい陣じん一い心こころ事こと敷しき十じゆ日にち

これ同よ一采小条が志のびりおれ二人  
を揃へ陣中に磔した

大権現小條と和睦有るに由に昔より  
て廻り廻り向ふに子根来足怪

百人と一采一頭と平岩主計頭  
親吉と昔より甲列の制法とらめ

九年を信一と廻中移後より  
目十八年小田原陣より又甲府  
より為守よりと

同年七月小田原没落

大権現雲東と既一と向ふ甲列

の志向ふ一と一采と先武器  
御形の内へ入る由よりして

武河根来らんとつけられ小武蔵の  
制法と定且又七百人は清代官

とつとを武列なりびり一列よ  
をひく事也二三百人をいふ

長五年奥列陣の時

大徳現の作あはせりしよりあるく

名徳院殿いりしはくとそまりしは徳しに徳

奉ほう沙さとかはしりし石い田た之の成なりとするこ

謀い叛はんとし方か々々起おこししふふとするこ

名徳院殿い津つ馬まとの白しろとし平へい向むひの中山ちゅうざん

道みちよりし進しん敷しありく美み田た表ひょうりし

津つ陣じんとしらし平へい向むひの時とき 津つとの明あき

ありしとし役やく所しよとし配はいふふとし長なが子こ正せい成せい也なり

大徳現のき麾き下かりしあらはは人ひと招まね来きたるこ人ひと

亂らんをの脚あし履ひきもく今いま年ねん石い田た滅めつ亡じやうとし天てん下か

津つ一いつ統とうのら板いた倉くら伊い賀が守しゅ勝しやう重じゆう日にち下か部ぶ

長なが太た走そう好こう津つ津つ法ぽう太た走そうをしらしびよ一いつ部ぶ

信しんをのりしあらはは信しん見けん城じやうの留守しゅ居い奉ほう沙さ也なり

とし向むかひしとし及およ津つ津つをし泉せん列れつ院いんの攻取とと

あらはは板いた倉くらとししらるこ京きやう都ととし居いとししらるこ

いはりし定じやう好こう一いつ部ぶ信しん見けん城じやうの留守しゅ居いと

けししらることし及およ津つ津つ平へい院いん守しゅ定じやう勝しやう城じやう代だい

とし向むかひしとし及およ津つ津つ平へい院いん守しゅ定じやう勝しやう城じやう代だい

ことごとく大事なる定勝判形とくは又  
 根来百人衆と申しく一乘吉原等  
 取申し 作と申しあり御列儀并那  
 七百石の侍代官とつゝも板倉伊候等  
 少しお下く新証の中と改訂し  
 元和六年六月二十八日一死と成  
 八十二

正成 まことなる

物乃石を小吉 後任五位下小叙  
 集人正一 任む 生糸 同か  
 幼少より

大指現 一つ久しきものよ 清小母位と  
 とうくを伝ふ

天正十二年四月九日長久寺合戦  
 一 味方利とう 一 寺守正成と  
 一 一 首級を討つりきりりり

大指現の沖 旗下一 一 物と申し

敵兵涉旗下とすつひ大軍とす  
て競きつるふとにといひく味方乃  
先これ將これと相すつひ付り  
正成馬と強くしゆんといふ家  
一

大捨現ここと割一終よあれど  
つわふ敵軍小く入地とりけり  
すつひつひ敵正成が徳の心とき  
形こつたをいひく正成力を好さく

とげくすつひこれをおく  
とつひ

日十八年小田原文禄年中肥前北後屋  
ある長五年法別 岡原等これ陣よ  
根米回るとありり涉旗下り  
ありく軍事とらとす

天下統一統のり米津法をいひ  
たろく京外院の政事とす其  
坂本多上野今正純其後常の在り



ぢらびよふ成 仰をうけし由

しりく天トの棧務と奉<sub>か</sub>行<sub>か</sub>し

尾張義直卿いとけしよ

智勇あつとツゑがゆふよ

大権現の四籠を白くあつて八軍乃

と比尾列し封せしはけ何正成

治とつりあつて傳をり回し均

制法とほごりて後府りつり石

定者も政務とつりしゑのれ又

これとつて

亨長十八年大久保相持守忠隣<sub>しん</sub>行

却<sub>く</sub>氣とつりゆり江列し配せし

子孫もつり遠那小しりはれ忠隣

をそんもつりても罷とつりへを謀

板しりしりもつりきこそあり

これしりしりもつり一紙の新帖と標

ていしりしりもつり我名担しり先君もつり

いふしりしりもつりむ代力もつり

世に布るるは法とらけり  
とぬりまは君忠よりほろぬを  
うげく誅せしむるを死刑を  
つらむるを誅せしむるを誅叛  
しるるを誅せしむるを誅  
せんぬり祈ねしを小波三府  
も心なるとも親族存高也

大徳現の心いり  
あつと云と心なれし  
正成これ

と中くあつと心なれし  
正成これ  
心なれし  
正成これ

大徳現清いり  
心なれし  
正成これ

目十九年豊臣秀頼令下を拒足

大徳現

右徳院殿大坂より津進後あり正成は  
旗下にありて軍事とほむ十一

月廿九日

大権現本多正純文友直次をいびよ

正成より敵下にて仙波乃敵軍は飛坊

と見えゆふに付石川自殿頭去任

陣とて家

大権現本多坊もくちよして利とうし

あけん事とわらんごうの正成を

よりくは使やうと清将長蔵より

敵後法をききしこくにきく

長蔵師匠とて兵報とすめ草

清よりいはいとせよ又正成法おの陣

取を巡りしと仕寄等れ軍事事

と志められしとて法おと平と

とげしとすくにもゆんと敵を

曾氣のわらふへしとらふとんく

とけしと仙波と焼て陣中より

去りて

元和元年此夏大坂東亂の時

つとむ五月七日

大坂現正成り令下して敵軍此形

場と云ふは

正成巡見一言とてい

屋ふ軍とけり

一と云ふは

城と云ふは

うらま

同二年義直卿正成と云ふは

陣自と云ふは

ろくは外之石を

正成尾列

從一石也

後

寛永二年正月十七日

法石宗心

正規

半正規 正位下 叙

半人正 任

長十六年 正位下 叙

正院殿 正規

同十九年 大坂清陣 任

正院殿 正規

侍 正規

大正規 正規

正院殿 正規

正院殿 正規

義直卿 正規

作 正規

正院殿 正規

正院殿 正規

正院殿 正規

寛永二年 正院殿 正規

之成

督を継國申れ政務とほほま  
山内御前と相承事化をくびり  
よりき 等父ヶ付のど

後位下 伊豆守

白河院殿一りのくまきり又か

譲乃化二万立石とすゆえに

之和元年大坂事俾れに首級を

ゆき

同八年根来足輕百人とあつた

寛永三年れま

將軍よりけんを酒井潜故書

忠勝青山大為相重成等少

かへく大にゆの書を

り

同九年躰馬より二十人と

同九年十月廿八日一死と威二

十九

女子

板倉圓防守重宗のま

之虎

友彦

父之成のなり之遺のい之継のつぎく一いつ百ひゃく又また子こ石いし

と既もと

寛永五年十二月二日に死にす

女子

小出勘三のり信のぶがま

吉正

初はつ乃の石いし之の勝かつ志し 後のち内うち之の助すけと改かへ

生なま國くに白しろ茶ちや

けいご

大おほ持もち現げんりりはは久くそそままりりのの法はふ

少すく性せい多たのの於お於お体たい思しりりととままりり目め事ことと

少すく福ふく一いつとと人ひととと計けいくく他た事ことりり

けいごは後のち落おち茶ちやのの金かね五ご秀しゆ秋あきりり

けいふまはかまは中納言利常より  
ばふ

長十九年大坂清陣のとき  
利常より書正と云ふことにて

佐吉此清を陣よりつづき一軍  
事と同しむ本多正純安友を次

なすびよ成徳正成等け首と云ふ  
より一軍に於て

大坂現使を彼やと為す也後よ付三人水

て書正よりと答へていふは

名部いふは

けい今より利常軍事と云ふか

そす母と云ふは

仰と云ふは十二月四日一列の書正

書正と云ふは

て士年と云ふは

希聖此龍と云ふは

より書正と云ふは



まゝめんとりま正馬とてとく場の  
邊一りそりし時一り陣中と  
決施とて形らま正の脇一り  
あつらて馬よりわたり家と御  
子もけ負くま志れと幸  
し一りと死せす  
元和元年大坂事乱五月廿日  
一り大野の馬と影信と我く  
うれ首と洋とり

ま正が妻一子二子なり

正勝

ま正 初れは右馬

ま長十九年八月八日一り一  
歳八旬一り一り正勝と推りて

大杉現一り一り一り一り一り  
職と正勝一り一り一り一り一り

ま一り一り一り一り一り

大杉現一り一り一り一り一り

沖黒下と一り

正則 まさのり

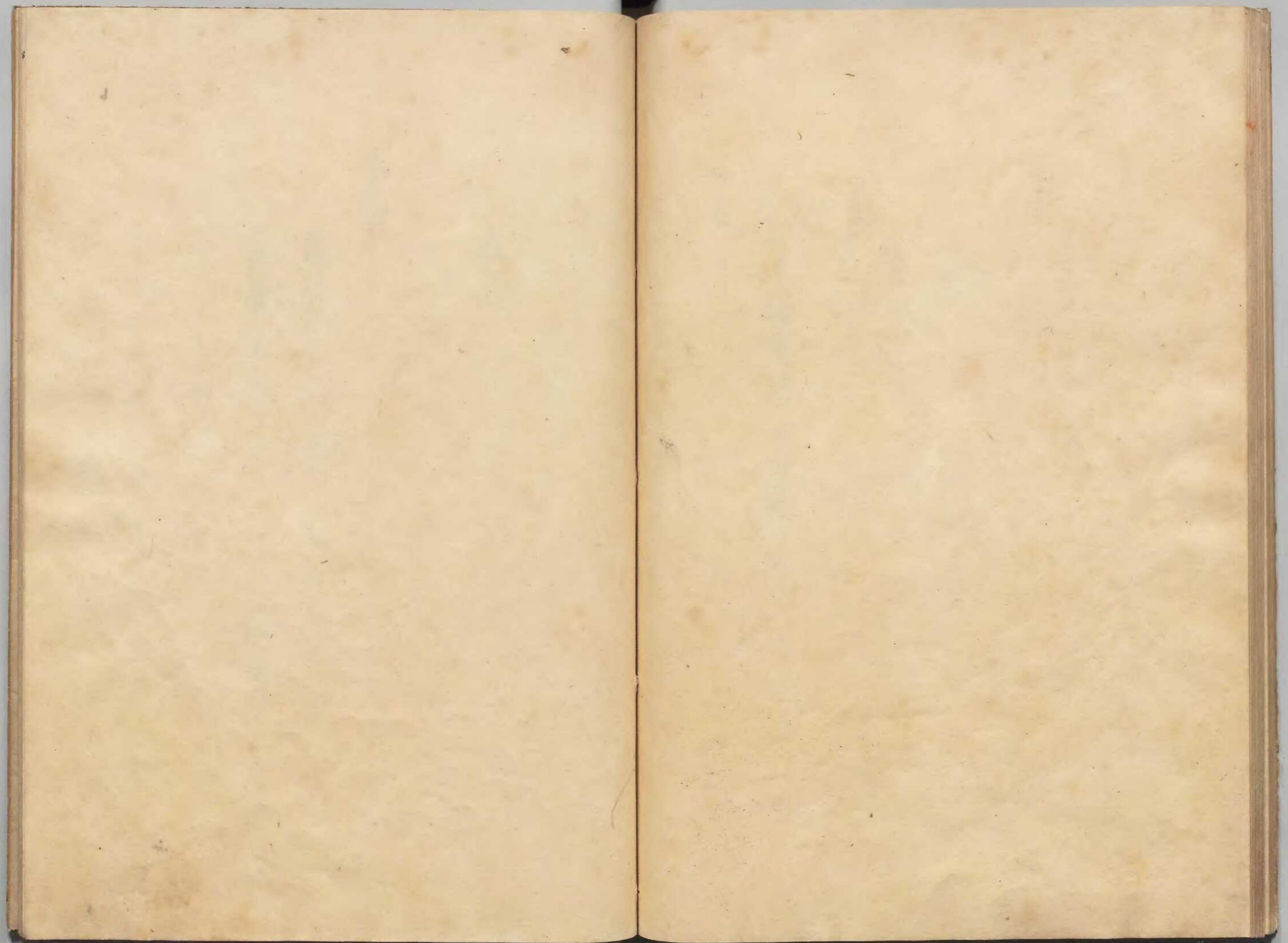
吉良忠房

義直卿よりけり妻は二子石を  
子留しけり白人十騎足押み千人  
とありけり

女子

早部大隅守宗好の妻

家紋 丸の内へ酸漿草



成瀬 なりせ

● 重貞 しげさだ

惣大将の尉 参列 まゐり 咲 はな 後 のち 那 な のり

長親 ちかちか 自 みづか ち ち ち ち び び 信忠 のぶただ 自 みづか ち ち ち ち び び

法 はふ 子 こ 月 つき 信 のぶ

天 あま 文 ふみ 十九年 三月 十四日 六十一之集 むら

小 こ 一 いち 死 し 法 はふ 名 な 正 ただ 三 さん

重倫

吉茂

中国回航

法康君よりびよ 廣忠より信より

信より

東照大権現一いつふきくつふか

小小原森の妻よりふれあり逆心

とさしけさみ武田信玄より回航

一信より諸士と

大権現の麾下一攻入一せん

重倫はめふ事くけ事と言ふ

これよりさき波長を討

むきれ 命令とく物りするら

討指

大権現これと感養一

魔古と登宇村そか僧の師と

たす

天正六年六月二十三日六十歳

とく死す

重宗 しげむね

吉師 よしかし 中園同前

大行現 おほゆきまへ ぼくをきこむるに

と正三年長藤合戦し首級と得 ちかしのりえん もきよえん

とく

同十二年四月九日長久の合戦の ちかぐて ろえん

と現清馬の討死 しんじまの うちとく 討死

時 とき 三十七歳 はひ

重正 しげただ

大進尉 中園同前

大行現

名進院殿

將軍家 しげ 勅任 ちくじん 中園

寛永十四年九月二十日七十歳 かんえい じゅうよんねん じゅうがつ にじゅうにち 七十さい

とく死す

重次 しげつ

吉高尉 よしたか

牛國武藏 うしくに

名徳院殿

將軍家よりはくまのり

寛永十年五月二十二日

死す

正房 しげふら

丸九郎

牛國向家

將軍家よりつるまのり

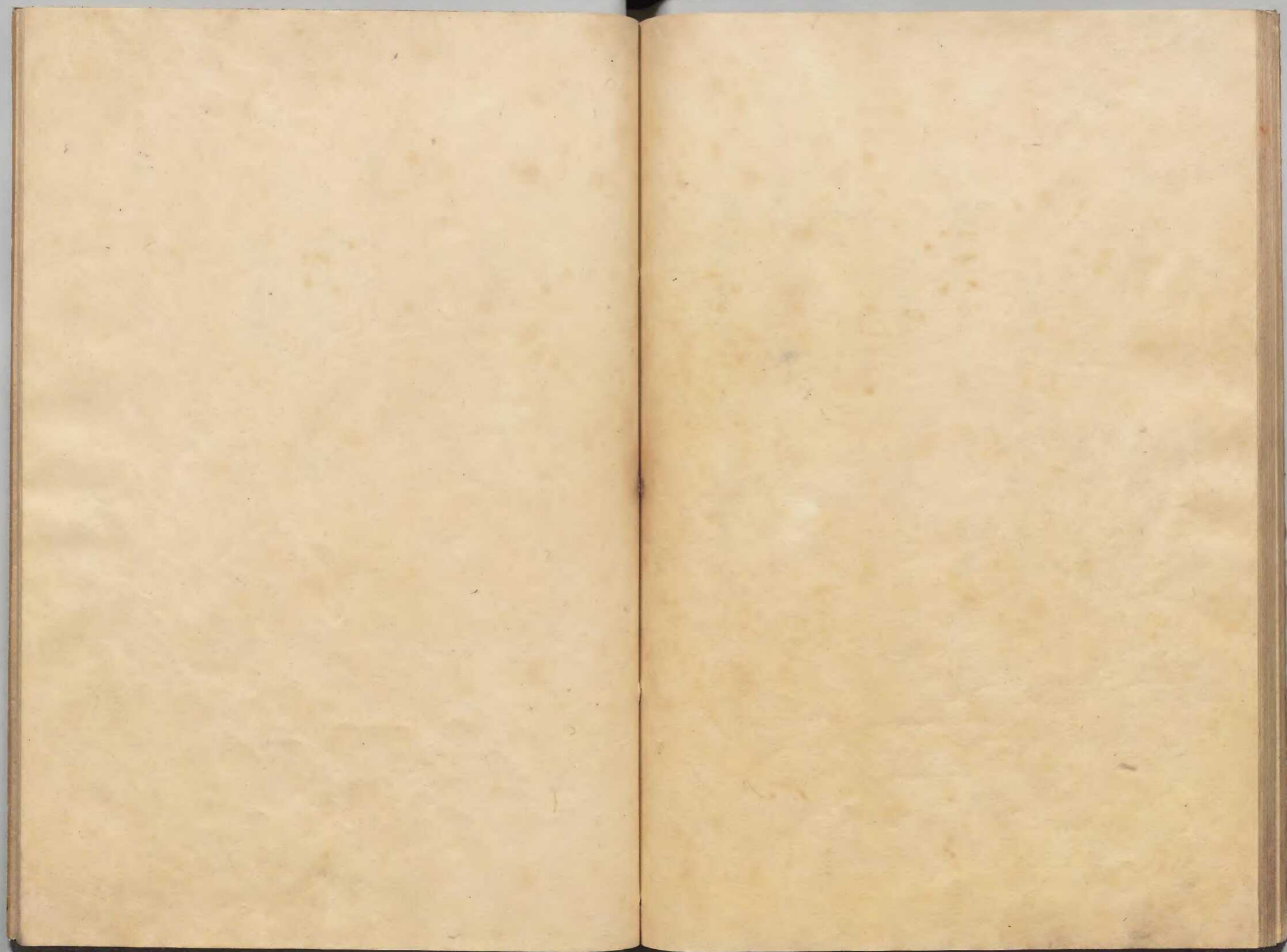
重常 しげつね

又吉

將軍家よりはくまのり

又重次が遺跡をたし

家紋丸に内鳩酸草





● 某

成順 なりと

河六郎 や

白濁冬河 と

廣志卿 ひろし 一川 いっせん 小三郎 こさぶら

某

二所右衛門尉

生國日記

一ノ先 廣忠ひろたけ一ノは二ノ後

東照大権現とうしょうだいこんげん一ノは二ノ三ノ家

正重ただしげ

一ノ七郎いちしちらう 中園なかつゆ 法名ほふな道受みちうけ

大権現

名正院なただしゐん殿のり一ノ二ノ三ノ四ノ家

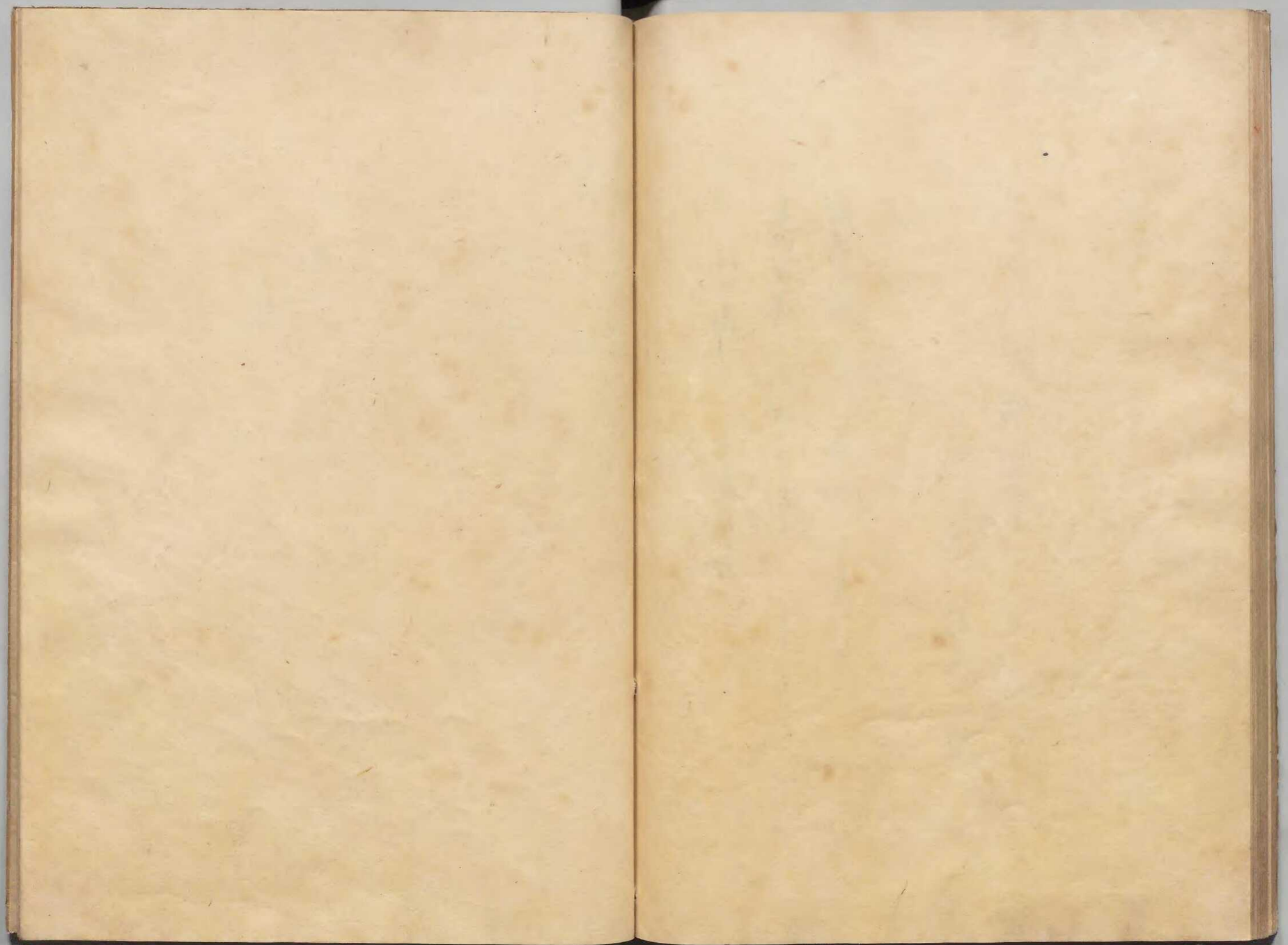
重元ただもと

一ノ七郎いちしちらう 中園なかつゆ 武藏むさし

名正院なただしゐん殿のり一ノ二ノ三ノ四ノ家

將軍しやうぐん家け一ノ二ノ三ノ四ノ家

家紋けもん 剣鳴けんねい 酸草くわんそう



成瀬 なりせ

● 松久 まつひさ

権助 かのすけ

冬列國海より来た

永禄六年十二月の...  
まじろく ねん じふに がつ の ...

東世大権現...  
とうせい たい けんげん ...

天正十八年小田原陣...  
てんしやう じふはち ねん おだわら じん ...

関東沖入...  
かんとう うちいり ...

長元十一年十一月十一日死 四十五歳  
法石淨元

久次

九基坊

中國回前

寛永元年 奥子

乃西番と云ふ

家紋鳩破年

● 重正

重正

法石常清  
鏡平右師以重門尉

中園冬河

成瀬

成瀬

成瀬と号り  
成瀬と号り  
成瀬と号り

重貞

貞子まこと右衛門尉

法名常榮とくさか

貞同前

重能

成瀬なるせ五右衛門尉

成瀬伊次子成瀬氏なるせと重能なるせ

はしけくこれより鈴本とありて死

貞同前

成瀬と稱なるせ

東照大権現

右衛門殿なるせ一子とありて死

寛永六年くわんえい六十一歳むそいして死

法名日健ひけん

重治

五右衛門尉

貞相模

右衛門殿

將軍家一はくそくしり

家紋

丸まのう鳴な鼓こ鞆たも革か



● 来

成瀬

て成瀬くあ〜んじ  
本を飲ま〜んじ久次〜んじ

飲本八尾為尉 生國記傳

飲本三郎之家か未孫片〜んじ冬列〜んじ

あ〜んじ 店忠卿〜んじ付〜んじ

藤城ふじしろとくとくのの稱号しょうごうとん

久次ひさつぐ

成瀬吉平なるせ きちへい

叔父おじ成瀬伊賀守なるせ いがのしゅ海うみ一ひと片ぺひて

子ことんとん海うみがが指さ入いりり流ながれれととああるる

しめ成瀬と号なるとごうとん

東照大権現とうしょう だいこんげん

右徳院殿みぎとくゐん どの一ひとははくくととゆゆりり家か

元和三年げんわ さんねん一ひととと死しすす

正吉しょうきち

吉平きちへい 中興武蔵ちゅうきゅう ぶさう

長十九年なが じゅうくにんねん

右徳院殿みぎとくゐん どの一ひとははくくととゆゆりり家か

將軍家しやうぐん けよよははくくととゆゆりり家か

重久しげひさ

三河長洲尉さんかわ ながしづ じゆう 中興武蔵ちゅうきゅう ぶさう

將軍の  
は  
く  
ま  
り  
の  
し  
る

まじり  
正名が幕紋

まじり  
板の丸

まじり  
重久が家紋

まじり  
丸の白鳥破草

